

25【街の散策からの気づき発見】

春の大落古利根川・遊歩道桜並木散策

会員 K.T.

春の大落古利根川を華やかに彩る桜並木を散策する。

古利根公園橋—春日橋—埼玉橋—八幡橋—牛島人道橋—
—(東部野田線鉄橋)—ゆりのき橋—藤塚橋、この橋を渡って
対岸を逆に、自転車を押しながら戻る。川沿いの桜並木は春
のおとづれを艶やかに演出している。3月下旬の後半に暖か
な日が続き、一挙に花が開いた。時節には咲く、すごいものだ。
桜は日本人に最も好まれる花である。古より歌に詠まれてきた。

諸説あるも奈良時代 759 年頃成立した我が国最古の歌集
『萬葉集』には44首、平安時代の 905 年に編集された最初の
勅撰和歌集、『古今和歌集』には70首の歌が詠まれている。

みわたせば 春日の野辺に 霞立ち

咲きにほへるは 桜花かも (萬葉集第10巻作者不明)

世の中に たえてさくらのなかりせば

春の心は のぞけからまし (古今和歌集 在原業平朝臣)

江戸時代、国学者の本居宣長(1730～1801)の歌は勇ましい。

敷島の 大和心を 人とはば

朝日に匂ふ 山桜花(やまざくらばな) (本居宣長)



現在、私どもが観賞する桜は、江戸末期に開発されたソメイヨシノの種になるが、それ以前は、“さくら”といえは山桜だった。奈良時代に中国から伝わった“梅”を愛でる文化に由来し、古来は花見といえは、“梅”であった。平安時代、894年に、それまで約260年間続いた遣唐使を廃止して以降、日本独自の文化が発展した。花見も日本に古くから自生していた“山桜”が選ばれたようだ。その花見は、桜の下で宴会をする、という風情ではなく、平安貴族たちが桜を愛で、歌を詠むという風流なものだった。一方、農民の方では、古くから桜の花見は行われていた。諸説あるも、“さくら”の「さ」は、早乙女や早苗の「さ」で、稲の神様を意味し、「くら」は座(くら)で、神様が宿る場所を意味していた。桜の木は「田の神様」が宿る場所とされ、桜が咲くと、田植えを始める目安とされ、神様に供えるお酒やごちそうを持ち寄り、豊作を祈願した。古の農民の花見行事は神事に近く、娯楽として楽しむものではなかったようだ。花見を今日のように娯楽として楽しむようになったのは江戸時代、元禄(1680～1709)の頃になる。お金持ちは豪華なお弁当をしつらえ、庶民も、それなりの御馳走をつくり、着飾って花見に出かけた。

江戸川柳に、 白壁を 両の手で塗る 花の朝 (玉柳)

花の朝 いやあと下女も ほめられる (柳多留)

花の雨 寝ずに塗ったを くやしがり (柳多留)

花見にお化粧を念入りにし、普段はなりふりかまわぬ下女もきれいになって、イヤーと声をかけられる。雨が降ると、お花見が流れてガッカリする様子等、賑やかな江戸の花見の情景が窺える。また、春の季語になる花見は、多くの俳句が詠まれている。芭蕉の高弟で、酒好きだった其角(1661～1707)に花見の句がある。

酒を妻 妻を妾の 花見かな (其角)

満開の桜の下で飲む酒はうまい、酒が本妻で、妻が妾になるかな、という。昔も今も、人々は桜が咲くのを待ち、咲けば喜び、すぐに散るのを気にかけてきた。桜を愛でながら、春また春、幾多の春を経た事を思う。

散ればこそ いとど桜はめでたけれ うき世になにか 久しかるべき (作者不詳・『伊勢物語八十二段』)